

行歯会だより 第116号

(行歯会＝全国行政歯科技術職連絡会) 平成29年1月新春号

【今月の記事】

- 1 『年頭所感』 P.1-
行歯会会長（江戸川区葛西健康サポートセンター） 長 優子
- 2 厚生労働省医政局歯科保健課長 特別寄稿 P.2-
厚生労働省医政局歯科保健課 課長 田口 円裕
- 3 フッ化物洗口の取組～各地のレポート～ P.3-
研究紹介：学校フッ化物洗口のう蝕の都道府県格差縮小効果が科学的に立証される
東北大学大学院歯学研究科 国際歯科保健学分野 松山 祐輔
- 4 第75回日本公衆衛生学会総会報告 P.5-
第75回公衆衛生学会 in 大阪に参加して
東京都豊島区池袋保健所 健康推進課 歯科衛生士 芦田 慶子

第75回 日本公衆衛生学会総会での自由集会に参加して P.6-
堺市南保健センター 主幹 黒田 千恵

1 年頭所感

行歯会会長（江戸川区葛西健康サポートセンター）
長 優子

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

また、行歯会の運営および活動につきまして、旧年中に賜りましたご理解とご協力に深く感謝申し上げます。



昨年は、各種学会や研修会等の会場で、多くの会員の方々とお会いする事ができました。新しい出逢いがあれば、そこに学びがあり、学ぶことで視野が広がり、日々の仕事が楽しくなります。これで良いのかと悩んだ時も、同じ悩みを抱えながら奮闘している全国の仲間を想うと、元気が湧いてきます。

この年末年始は、のんびりと本を読む時間がありました。ネットで本が購入できるようになってからは“積読”が増える一方でしたが、昨年を振り返り 2 冊の本を旅のお供に手に取りました。相次いだ震災のこと、あちこちで耳にした“健康格差”について、改めてじっくり考えることができました。

- 繋ぐ ― 災害歯科保健医療対応への執念つなぐ―（クインテッセンス出版）
- 健康格差対策の進め方―効果をもたらす 5 つの視点―（医学書院）

今年も全国の会員の皆様とつながることで、各地域で積み上げてきた地域歯科保健をさらに発展させ「日本国民に世界最高水準の歯科保健を提供」することを目指してまいります。本年が、皆様にとって実り多き一年となりますよう、心よりお祈り申し上げ、新年のご挨拶いたします。

2 厚生労働省医政局歯科保健課長 特別寄稿

厚生労働省医政局歯科保健課 課長 田口 円裕



ご挨拶が遅くなりました。昨年 4 月 1 日に歯科保健課長に就任しました。歯科保健課は、10 年ぶりです。

【最近の歯科保健課トピックス】

平成 29 年度は、「歯科口腔保健の推進に関する基本的事項」や「健康増進計画＜健康日本 21＞」の中間評価をはじめとして、「医療計画」、「介護保険事業計画」、「医療費適正化計画」の次期計画策定や「認知症対策＜新オレンジプラン＞」の評価見直しなど、歯科口腔保健の取組みを反映する必要がある様々な部局での計画の見直し等が予定されています。このため、平成 27 年 10 月に設置された歯科口腔保健推進室を中心に部局横断的な戦略会議を開催し、各計画の見直しに歯科保健分野を反映していくことが必要であると考えています。

また、昨年 7 月には口腔保健支援センター長会議を開催するとともに、ブロック会議等を通じて、地方公共団体等との意見交換を行いました。さらに、初めての試みとして、8 月には市町村職員を対象としたセミナーを実施し、今後も歯科口腔保健の推進に関する国の考え方や地域での先進的な取組みを積極的に情報発信していきたいと考えています。

【行歯会への期待等】

今後の歯科医療サービスの提供体制に関しては、我が国が進めている「地域包括ケアシステム」の中で考える必要があり、医療機関完結型の歯科医療から地域完結型の歯科医療への移行や在宅歯科医療を担う、あるいは多職種との連携ができる、かかりつけ歯科医機能をもった歯科医師の役割が極めて重要になってくると思われます。

このような中で、行政に勤務する歯科専門職の役割も多様性が求められています。すなわち、「う蝕や歯周疾患の予防対策」や「歯科保健指導」などの歯科分野のみの対応だけでなく、地域が目指す「地域包括ケアシステム」の中での歯科保健医療の役割を意識した上で、様々な部局との連携や調整をお願いできればと思っています。

また、「歯科口腔保健の推進に関する基本的事項」の中間評価では、歯科口腔保健法の基本理念である「健康格差の縮小」を目指して、国単位、自治体単位、地域単位でその方策を明確にすることが必要であろうと思っています。その方法論を行歯会の皆様方と共有し、施策として具現化できればと考えています。

【最後に】

少し古いデータ（平成 26 年 4 月現在）になりますが、歯科保健課が調査した行政に勤務している歯科専門職の人数をみると、歯科医師が 157 名・歯科衛生士が 483 名となっています。都道府県・市町村に勤務している歯科医師・歯科衛生士の割合は、「平成 26 年の医師・歯科医師・薬剤師調査」の歯科医師数が 103,972 名なので 0.2%、「平成 26 年度衛生行政報告例」の就業歯科衛生

士数が 116,299 名なので 0.4%となります。行政に勤務する歯科医師・歯科衛生士は、非常に少ない現状となっています。むしろ少ないからこそ、我々行政に勤務する歯科専門職の役割や責任は重大で重要なものであると思っています。

厚生労働省のHPに、「国のあるべき『未来』は、国民ひとりひとりの『幸せ』が集まってできるものです。」という記載があります。歯科保健医療を通じ、国民の健康な生活を確保するという公共的な任務を有している我々歯科専門職は、その『幸せ』の基礎となる国民の健康をいかに確保していくかを第一に考える必要があります。そのためには、行政に勤務する歯科専門職は、その未来を見据えて科学的な歯科保健政策を実践する責務があります。政策を具現化し、実践するためには、今を変えることだと思います。今を変えなければ未来は変わりません。

子供たちや高齢者をはじめとした、国民の健康を守るために、私たちひとりひとりが、今何ができるかを考えましょう。

3 フッ化物洗口の取組～各地のレポート～

研究紹介：学校フッ化物洗口のう蝕の都道府県格差縮小効果が科学的に立証される

東北大学大学院歯学研究科 国際歯科保健学分野 松山祐輔



はじめまして。東北大学大学院歯学研究科・国際歯科保健学分野・大学院生の松山祐輔と申します。学校フッ化物洗口の 12 歳児う蝕の都道府県格差縮小効果を科学的に立証した研究について紹介させて頂く機会をいただきましたので、ご紹介致します。この研究が、フッ化物洗口のさらなる普及に役立てば幸いに存じます。

【研究概要】

これまでに報告されているように、子どものう蝕の多さは、都道府県で異なります。小学校や保育園での集団フッ化物洗口（以降、学校フッ化物洗口とします）は、家庭の社会経済状態によらず、あらゆる子どもがフッ化物のう蝕予防の恩恵を受けることができる、う蝕予防の優れたポピュレーションアプローチです。佐賀県や新潟県など、学校フッ化物洗口が広く普及している都道府県では、3 歳児にくらべ、12 歳児のう蝕の都道府県順位が大きく改善しています（図 1）。フッ化物配合歯磨剤が広く普及した今日においても、学校フッ化物洗口は子どものう蝕予防とう蝕の地域格差を減らすのに有効であることが、日本むし歯予防フッ素推進会議のデータを使用した研究により明らかになりました。

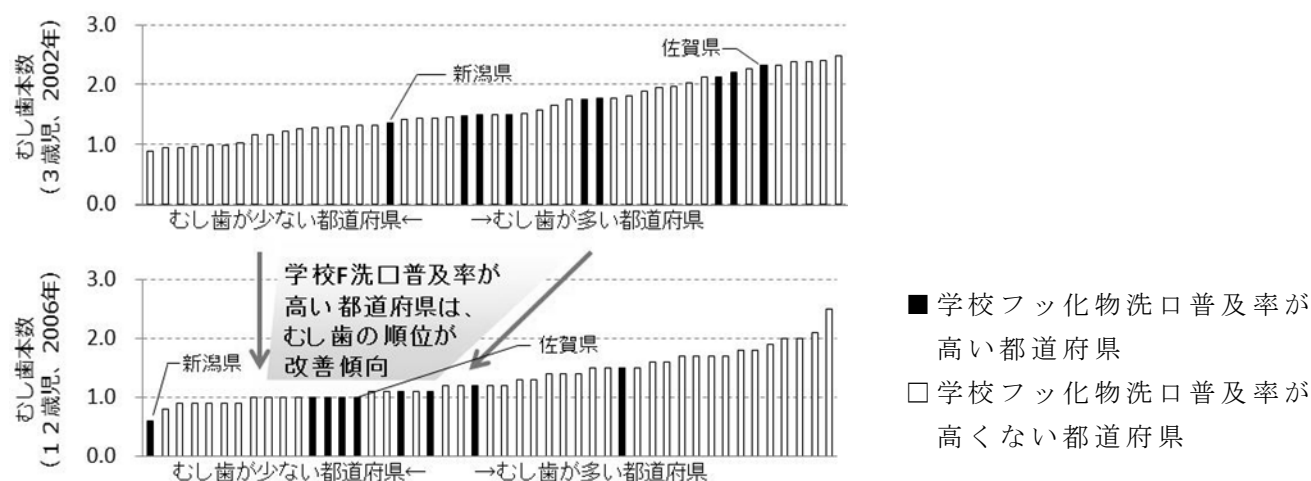


図 1. 都道府県ごとの学校フッ化物洗口普及率とむし歯

都道府県単位で集計されたデータを使用し、1994 年から 2000 年までに生まれた子どもの、6 歳児の学校フッ化物洗口の普及率と、3 歳児の 1 人平均う蝕本数、県民平均所得、砂糖消費量、フッ化

物配合歯磨剤消費量、歯科医師密度と、12 歳児の 1 人平均う蝕本数の関係を、マルチレベル線形回帰モデルで統計学的に分析しました。その結果、学校フッ化物洗口が 1%普及するごとに、12 歳児 1 人平均う蝕が 0.011 本有意に減少することが明らかになりました。学校フッ化物洗口の普及が高いほど 12 歳時 1 人平均う蝕が大きく減少するという、量反応関係も認められました (図 2)。さらに、都道府県間のう蝕の差のうち、25.2%が学校フッ化物洗口により説明されました。これは、1994 年から 2000 年の間にみられた、う蝕の都道府県格差の 4 分の 1 が、学校フッ化物洗口の普及率の差によるものだということを示しています。学校フッ化物洗口のう蝕予防効果は、3 歳児う蝕が多い都道府県ほど大きく、学校フッ化物洗口によりう蝕の地域格差を縮小できることが示されました (図 3)。

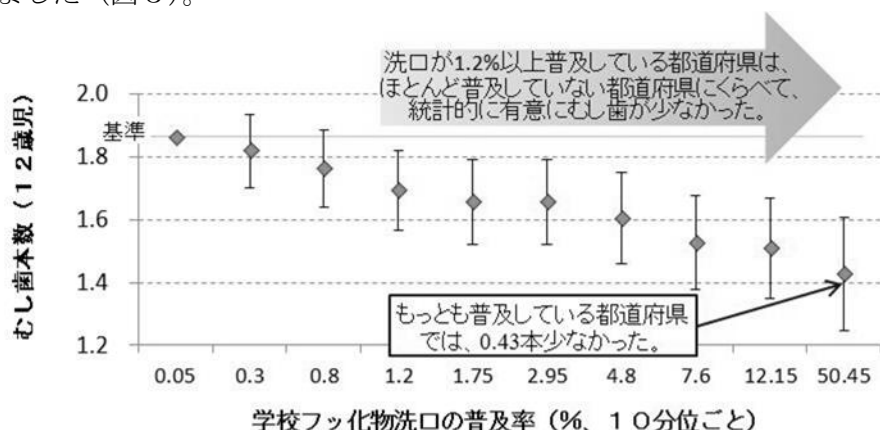


図 2. 学校フッ化物洗口の普及率とむし歯の減少度

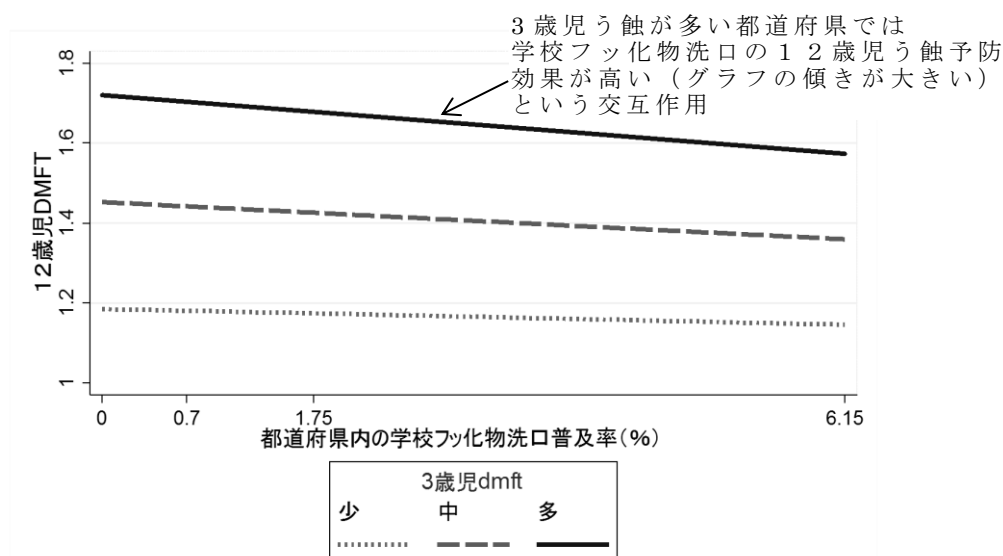


図 3. 3 歳児う蝕と学校フッ化物洗口の交互作用効果

確かに、歯科医院でのブラッシング指導や、健康教育などの個人への介入は、大切なう蝕予防のアプローチのひとつです。一方で、これらは、知識を行動にうつすという個人の努力を多少なりとも必要とします。う蝕のリスクが高い子どもは、家庭などまわりの環境に問題があることが多く、個人への介入が届きにくいことが、「逆転するケアの法則」として知られています。この研究により、フッ化物配合歯磨剤が普及した現在でも、学校フッ化物洗口がう蝕予防とう蝕の地域差の縮小に有効であることが示されました。これは、学校でのフッ化物応用が、家庭環境に関わらず、あらゆる子どもに対してう蝕予防効果を発揮していることを示唆しています。地域や社会経済状態によるう蝕の健康格差縮小のために、学校フッ化物洗口のさらなる普及が望まれます。

【補足情報】

- 本記事のカラーの図と、研究の概要をふくむプレスリリースを、以下の URL からダウンロード

ドできます。

- ・東北大学大学院歯学研究科・歯学部ホームページ

プレスリリース 2016. 04. 25 学校フッ化物洗口がむし歯の地域格差を改善していた

<http://www.dent.tohoku.ac.jp/news/view.html#!298>

- 詳細な研究論文を、以下の URL から無料で読むことができます（英語版）。

Matsuyama Y, Aida J, Taura K, Kimoto K, Ando Y, Aoyama H, Morita M, Ito K, Koyama S, Hase A, Tsuboya T, and Osaka K. School-based fluoride mouthrinse program dissemination associated with decreasing dental caries inequalities between Japanese prefectures: an ecological study. Journal of Epidemiology. 2016;26(11):563-571.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jea/26/11/26_JE20150255/_article

【本研究に関する連絡先】

相田 潤 j-aida@umin.ac.jp

松山 祐輔 matsuyama-thk@umin.org

東北大学大学院 歯学研究科 国際歯科保健学分野 (Tel: 022-717-7639)

【論文】 Matsuyama Y, Aida J, Taura K, Kimoto K, Ando Y, Aoyama H, Morita M, Ito K, Koyama S, Hase A, Tsuboya T, and Osaka K. School-based fluoride mouthrinse program dissemination associated with decreasing dental caries inequalities between Japanese prefectures: an ecological study. Journal of Epidemiology. 2016;26(11):563-571.

【謝辞】フッ化物洗口実態調査に携わり、詳細なデータ収集にご尽力くださったすべての皆様、研究実施にあたりご指導くださった皆様に、記して深謝致します。

4 第75回日本公衆衛生学会総会報告

第75回公衆衛生学会 in 大阪に参加して

東京都豊島区池袋保健所 健康推進課 歯科衛生士 芦田 慶子

○はじめに

行歯会の皆様、いつもたくさん情報提供いただき、ありがとうございます。

東京都豊島区は、常勤歯科衛生士1人体制、という東京23区の中でも厳しい状況なので、いつも皆様からの情報提供で日々勉強させていただいており、心強く思っております。

1人職種ということもあり、事業があつて日程調整が難しい状況でしたが、このたび、上司や職場の皆様の後押しもあり、学会に初めて参加することができました。

○初めての大阪！学会！

個人的に、大阪の地は初めて、学会も初めてなので、①歯科の発表の他にも、違う分野の発表も聞く②いろいろな方々とお話する③大阪を楽しむ、というざっくりとしたテーマを自分の中で掲げて学会に臨みました。

分厚い公衆衛生学会総会抄録集を事前に取り寄せ、気になるテーマをチェックしておき、いろいろな発表を聞くことができました。シルバー人材から派遣された高齢者が学校給食を子ど



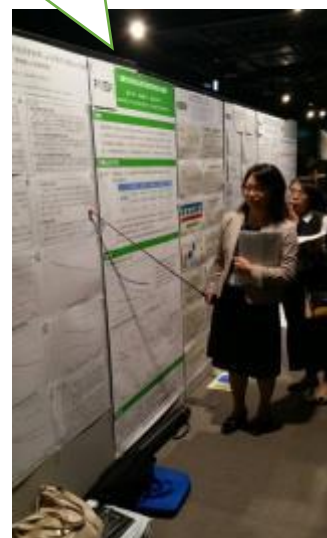
大阪公衆衛生学会
看板

もたちと一緒に食べることによる食育、子どもたちと高齢者が一緒に歯磨きをし、子どもたちの反応がどうだったかという話、食べる機能がもたらす健康格差の話や、同じ東京都の足立区の取り組み「あだちベジタベライフ～そうだ、野菜を食べよう～」の発表を聞くことができ、大変勉強になりました。他の分野の発表（糖尿病や脳卒中予防の取り組みや貧困・フレイルなど）を聞く機会もあり、公衆衛生全体の流れを漠然とではありますが、感じることができました。自由集会では、様々なご意見を聞き、懇親会まで参加し、大阪の夜を楽しみました。

学会会場
様子



東京都福祉保健局
白井課長ポスター
発表の様子



○学会の後のお楽しみ

お勉強の後は、もちろん、楽しみにしていた大阪観光です！大阪グルメを堪能し、帰りの新幹線ではビールと蓬莱 551 の豚まんを締めました。

○職場への報告

職場に戻ると、上司や保健師さん、栄養士さんに、学会で勉強したこと（と観光の話）を情報提供し、職場でちょっとした連携を取ることができました。

○おわりに

全国的に、行政の歯科保健担当者は少数で、各センターに1人配置、ということが多いかと思います。その中で、勉強に出かける機会をつくるのは難しいかもしれません。しかし、顔をみて、話を聞くことで、本やネットの情報だけではつかめない、「気づき」がありました。今後も業務に支障が出ないよう調整できれば、積極的に学会に参加したいと思います。そして、気づいたこと、勉強したことを自分の職務に活かしたいと思いました。

大阪観光中
執筆者近影



第 75 回 日本公衆衛生学会総会での自由集会に参加して

堺市南保健センター 主幹 黒田 千恵

<夏ゼミ懐古>

「次世代の健康社会実現のための公衆衛生人材育成」をテーマに、第 75 回日本公衆衛生学会総会が 10 月 26 日～28 日、グランフロント大阪で開催されました。

その 27 日に、久しぶりに自由集会に参加いたしました。

思い起こせば、はるか昔に私が初めて公衆衛生学会の自由集会に参加したのも、大阪でした。あの時代、真夏の 8 月に厚労省で全国歯科保健技術職員研修となるものがありまして、顔見知りとなった歯科医師・歯科衛生士の方々も数名参加されていました。この時に感じたのが「歯科専門職のつながり」でした。その自由集会後にお誘いを受け、よく分からないままに翌年参加したのが「夏ゼミ」です。

今回の自由集会では、この夏ゼミの懐かしい先生方のお顔を拝見しました。中にはウン十年ぶりにお目にかかった方もおられました。大げさに言うと「夏ゼミ」は私の（仕事上の）青春時代みたいなものです。

ご存知のように歯科衛生士は就業者 116,299 人の内の 90.5%が診療所に勤務しており、保健所および市町村勤務は 2718 名とおおよそ 2.3%です（平成 26 年衛生行政報告例）。よって教育現場では臨床での戦力として養成されているのが現状です。確認できませんでしたが私の卒業時はおそらく 2.3%より少なかったのではないのでしょうか。堺市に入職したころの私も行政に就職したという意識は薄く、勤務先が診療所ではなく保健所だという程度のものでした。

そんな約 30 年前に初めて参加した夏ゼミは「新鮮!」「ワクワク」「自由」「楽し過ぎ」等のキーワードでもって強烈な印象を残し、知り合った中野区の歯科衛生士白田さんの活動を眩しく感じました。その後「楽しいから参加する」が「学べるから」に変わり、「行政で勤務する歯科衛生士は何を求められているのか?」という、ベタなフレーズの答えを探しながら、この夏ゼミへ継続的に参加していきました。その後は口腔衛生学会への参加や国立保健医療科学院の研修等をとおして、少しずつ「公衆衛生」という地域社会すべての人々の健康の保持増進、疾病予防のための衛生活動を意識するようになり、「どうすれば歯科衛生士として地域の役にたてるのか?」を考えるようになりました。また、夏ゼミを立ち上げたお一人である神奈川県北原先生から「行政は実践が大事だよ」と言われたことは大きく、専門職が重要と捉えた健康課題をどうすれば施策にまでもっていけるのか?行政の大半を占める事務職の方に理解してもらうにはどうしたらいいのか?といったいわゆる行政的な能力の必要性についても考えていきました。

ここまでが、行政歯科衛生士として全く何のビジョンもなく、たまたま縁があって堺市に就職した私の、変遷です。（格好良く言い過ぎ）

<役職と専門性>

話は大きく変わりますが、二年ほど前に私は、歯科衛生士として初めて課長補佐級である「主幹」という役職に就きました。堺市を例にすると保健師は、係長を数年経験し主幹、参事(課長級)というキャリアラダーがあります。残念ながら保健師以外の保健専門職は、ほとんどがそういう機会を得られていませんでした。そんな中で保健師の主幹と同じ「調整担当主幹」という役職に就いたのです。

所属の保健センターには、保健師の係長が率いる専門職の係が 2 つあり、保健師を中心に管理栄養士、精神保健福祉士等が配置されていました。その上部に保健師の主幹がおりマネジメントにあたるのですが、そこへもう一名、歯科衛生士の主幹が配置されたという

ことです。当時の上司から言われたことは「専門（職能）のことだけでなく、行政組織の一員として調整担当主幹という役職に努めてください」ということでした。

幸いにも所属する保健センターでは、周囲が暖かくこの前例のない人事を応援して下さいましたが、保健師職能の戸惑いは小さく無かったと思います。若い保健師から「私たち、歯科衛生士さんの言うこと聞かないといけないんですか？」と言われました。専門職にありがちなことで、行政組織の指揮命令系統ではなく職能としてのそれを優先してしまう一面です。一般行政職（事務職）との間にズレを生じる一因ですが、正直ちょっとメゲました。

そのような状況下で役職を持ち保健師等と様々な業務にあたるうち、あらためて強く感じたのは、公衆衛生の重要性でした。公衆衛生は専門性の違いはあっても行政で働く保健専門職にとって共通の概念だと思います。公衆衛生という大きな土壌の上では歯科衛生士も保健師も地域の健康づくりに取り組む保健専門職として平等、対等であると感じます。

そうこうするうちに私の歯科保健業務における戦略も少し変化してきました。それまでの私は常勤職という使命感もあり、「とにかく歯科保健の重要性を地域に広めたい」と熱く猪突猛進していましたが、「もっと上手に効果的に広めるにはどうしたらいいのか？」を肩の力を抜いて考えるようになりました。歯科保健の推進だけを考えていた私が、「公衆衛生の中の歯科保健」を考えるように変わりました。

所属保健センターの管轄地域は人口 14 万 8 千人弱、20 小学校区に歯科衛生士は私と非常勤の 2 名です。その 2 名だけで歯科保健を推進するのではなく、保健師が地区活動の中で「歯科にも取り組む」という環境（雰囲気）づくりに取り組みました。「歯科衛生士さんの言うてること、手軽にできて大事やから私も地域でやってみよう」という理解を得ることが大切です。すると保健師から「今度、老人会で健口体操したいけど、これでいい？」や、「口腔機能向上関連のパンフレットを、分けて」と言ってくるよう

になり、地域での歯科保健啓発を手伝ってくれるようになりました。以前の私なら「歯科衛生士の存在価値が薄れるのでは？」などと狭い考えをしていたものです。少し立ち位置が変わるだけで、歯科保健業務の在り方についても高い視点と広い視野で、今まで以上に公衆衛生を意識し考えるようになった気がします。

＜歯科専門職のつながり＞

行歯会メールでは平成 29 年度の歯科衛生士職員採用案内が複数送られており、喜ばしいことです。堺市でも退職に伴う補充ですが 1 名、採用予定です。順調にいけば 10 年足らずで一気に世代が変わります。行歯会だより 114 号で神奈川県田村さんが新任期歯科衛生士育成マニュアルについて書いておられましたが、こちらでも作成が急がれています。



歯と口の健康づくりボランティア「南 8020 メイト」のみなさん
& 堺市南区のイメージキャラクター「みみちゃん」

公衆衛生に根ざした地域のために働く歯科衛生士に育ってほしいと願いながら、歯科衛生士みんなで取り組んでいます。神奈川県のマニュアルもぜひとも参考にさせていただきたいと思います。

たまたま行政に就職した私が、公衆衛生の重要性に気付けた背景には、「歯科専門職のつながり」があったからだ、つくづく感じます。数が少ないからこそ「つながり」「支え合い」一枚板のように強くなれる、そんな行政の歯科専門職のぬくもりを、（僭越ながら）役職として保健師を部下に持って、特に感じるようになりました。

「公衆衛生から歯科をみるんだよ。歯科から公衆衛生をみるんじゃないよ」という北原先生のことばの意味の重さを感じながら、あと数年、行政歯科衛生士として「歯科専門職のつながり」に育ててもらった恩返しをしながら、走っていきたいと考えています。

以上のようなことを「公衆衛生人材育成」をテーマとした今回の自由集会で、司会の堀江先生（奈良県）から突然マイクが渡され、何の準備もなく思いつくままに話しました。独りごとのようなものです。読み流してください。

☆編集後記☆

(Y) いよいよ 2017 年スタートしました！会員の皆様、今年もどうぞよろしくお願い致します。

そして原田先生、1 年間、編集担当お疲れ様でした(^ ^)/

(H) 行歯会だよりの編集担当が今月号で最終となりました。突然の執筆御依頼メールにあたたかくお引き受けいただき、皆様、どうもありがとうございました。

今年もどうぞ宜しくお願いいたします。

「歯っとサイト」 掲載コンテンツ募集！

「歯っとサイト（歯科口腔保健の情報提供サイト）」

<http://www.niph.go.jp/soshiki/koku/oralhealth/index.html>

では、掲載コンテンツを募集しています。

・ Web 媒体（リンクをはる）場合は、下記 URL へ

<http://www.niph.go.jp/soshiki/koku/oralhealth/youbou.html>

・ PDF 等のファイル媒体での提供も可能です。

希望される場合は、「行歯会だより」の配信メールに記載されている窓口宛に御連絡ください。